
鬼と桃

ケイゴリアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼と桃

【Nコード】

N2112A

【作者名】

ケイゴリアン

【あらすじ】

日本昔話「桃太郎」のアレンジです。

第1話 「鬼と桃」

むかしむかしとある山奥に年老いた夫婦が住んでいました。

二人はこよなく自然を愛し、とても仲の良い夫婦でした。

ある日、おじいさんはふもとの町に山で採れた山菜を売りに行きました。

おばあさんは川へ洗濯をしに行きました。

おじいさんは町で山菜を売っていると、ある噂を耳にしました。

「なあ、聞いたか。鬼が島に住む悪い鬼がこの町に近づいているらしいぞ。」

「本当か。」

「ああ、質屋の平吉が山の反対側で目撃したって、今日にも来るんじゃないのか。」

「えらいこっちゃ、えらいこっちゃ。」

おじいさんはおばあさんのことが気になり、いつもよりはやく帰ることにしました。

一方その頃おばあさんは・・・

几帳面なおばあさんは一枚一枚念入りに洗っていきます。

やがて全て洗いきったところで暫し休憩することにしました。

おばあさんがぼけーっとしていると

川上から大きな大きな桃がどんぶらこと流れてきたではありませんか。

大きさは2尺ほど。

おばあさんは大きな桃に驚きましたが、

二人は大の桃好きだったのでおばあさんは迷わず持ち帰ることにしました。

しかし、年老いたおばあさんい洗濯物と桃を家まで持ち帰る力がありません。

おばあさんが途方に暮れているとやがておじいさんが帰ってきました。

「ばあさんや、鬼が・・・」

おじいさんが鬼のことを伝えようとすると突然目の前に大きな桃が現れた。

「ば、ばあさん・・・この桃は・・・」

「あらじいさん、川上から流れてきたのですよ。どうですお昼に食べるのは。」

「それはいい考えじゃ。早速持ち帰ろう。」

二人は家路を急いだ。

おじいさんの頭の中は桃でいっぱい。鬼のことなど忘れていました。

第2話 「桃の出生」

家に着いたおじいさんとおばあさんはとても興奮していた。
なぜなら、大好きな桃があるからである。

おじいさんは急いで包丁を取り出しました。

「ばあさん、いくよ」

おばあさんはこくりと一度うなずいた。

おじいさんの額からは汗が流れている。

・・・二人は息を呑んだ。

おじいさんは包丁を入れた。

「おりゃあああああ、ああ、あれ？」

おじいさんはびっくりした。

「どうしたのですか。」

「な、なかに空洞があるのじゃ。」

「空洞・・・ですか？」

おじいさんは慎重に桃を切っていった。

すると中から子どもの足のようなものが見えてきました。

二人はビックリしてしりもちをついてしまいました。

その振動のあと桃の中から泣き声が聞こえてきました。

「おぎゃあ、おぎゃあ。」

「ばあさん、生きとるぞ。」

おばあさんは桃の中の赤ちゃんを抱き上げました。

「あらあら、よしよし。」

「おぎゃあ、おぎゃあ。」

おじいさんが桃の中を見ると一通の手紙と桃の印の鉢巻きがおいで
ありました。

おじいさんは両方を拾い上げ、手紙を開きました。

”突然で申し訳ございません。私達はもう生きることができません。どうかこの子だけでも助けてください。お願いします。”

おじいさんはこの手紙をおばさんに見せました。

二人はこの赤ちゃんの両親のことが気になりました。

「じいさん、まだご両親は遠くに行っていないのですか？」
そして、おじいさんは両親を探しに川上へと行きました。

日が沈んだ頃、おじいさんが帰って来ました。

おばあさんが近寄ってきて言いました。

「どうでした？」

おじいさんは首を横に振って家の中に入って行きました。

第3話 「桃太郎」

家に入った二人は相談して赤ちゃんを育てることにしました。

「ばあさん、名前はどうかね？」

おじいさんは一生懸命考え、決めました。

「ばあさん、桃から生まれたから”ももろう”というのはどうじゃ？」

おばあさんはしばらく考えた末、こう言いました。

「・・・太郎、太郎はどうですか？」

「いい名前じゃあ」

おじいさんは満足げな顔で太郎を抱かかえました。

その隣で、おばあさんはにっこり微笑んでいました。

そして、二人はきれいに桃を食べました。

——その夜、鬼は町を襲い、食料や宝物や女の人を奪い去って行きました。

やがて太郎はすくすくと成長していきました。

数年後のある日・・・

5才になった太郎はおじいさん、おばあさんと一緒に町に出かけました。

太郎は町に行くのは初めてです。

町に着くと買い物を始めました。

太郎は始めてみるものばかりで興奮していました。

興奮している太郎に町の人が声を掛けてきました。

「ぼうや、名前は？ あのおじいさんとおばあさんのお孫さんかい？」

「ぼくはたろう。ぼくはももからうまれてきたの」

「もも？ ももってえとあの果物の桃かい？」

「そうだよ」

「そうするとぼうや、桃太郎じゃな。がははははは」

町の人は大声を上げて太郎を馬鹿にしました。

それから太郎は町の人々から”桃太郎”と呼ばれるようになりました。

数日後、再び太郎達は町にやってきました。

買い物をしていると太郎くらいの年の女の子が声を掛けてきました。

「こんにちわ、わたし”おはな”ってゆーの」

「ぼく、たろう。ももからうまれてきたんだ」

「ももからあ？ へんなのお」

二人の会話に気が付いたおじいさんが言いました。

「太郎、お友達ができたみたいじゃんの。遊んでおいで」

「やったああ」

太郎はとても喜びました。二人はおおはしゃぎで走り出します。

おじいさんとおばあさんは遊んでいる姿を見て、とても幸せそうでした。

が、そんな幸せの瞬間も束の間。

町のはずれから大声を上げて走ってくるではありませんか。

「なんじゃ、なんじゃ」

「おーい、鬼が来るぞー。みんな隠れろお」

町はざわめいた。あの日以来、鬼は姿を現していなかったからです。

「ばあさん！ 太郎は？」

おばあさんは慌てて太郎の方に駆け寄り、太郎を抱きかかえました。

「太郎、逃げますよ」

「ばあさん、鬼がすぐそこまで来ているぞい。どこかに隠れるのじゃ」

三人は近くの倉庫に隠れました。

やがて大きな声が聞こえてきた・・・。

「人間ども、宝石をだせ！ 食料をだせ！ 女をだせ！」

——鬼の声だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2112a/>

鬼と桃

2011年1月9日07時45分発行